

【統合困難な地域における教育環境の充実の取組モデル】
○複数の学校や政策領域と連携して教育の高度化を図った例

1. 市町村の概要

◆人口：10,901人（平成30年5月現在）

◆小学校：8校，児童数482人 ◆中学校：3校，生徒数228人

※学校数，児童生徒数は平成30年5月1日現在

◆市町村全体の学校の統合・存続の状況

邑南町には小学校8校，中学校3校がある。小学校8校のうち5校は複式学級を有する小規模校である。平成23年3月末に学校の耐震化事業を端に，小学校1校がやむなく近隣校に統合した。地域や保護者とのやりとりを通して，今後は学校の規模と本町教育のあり方を示す必要があるとの判断から検討委員会が設置され，「この町で暮らすことを自ら選び，支え，よりよい町づくりに参画する子どもたちの育成」を骨子とした諮問が行われた。その答申を受け，教育委員会は「地域に愛着と誇りを持ち，地域の課題解決に参画できる子供を地域あげて育てていくために，地域と学校の強い連携が求められることから，地域に小学校は欠くことのできない存在であり，当分の間は統合しない」との判断をし，首長，議会にも承認され学校統合の計画はない。

2. 研究タイトルと研究課題

◆研究タイトル

「知りたい やってみたい 伝えたい」を育てる学校づくり

◆研究課題

- ①様々なことに興味を示し，「なぜ？」と問い，主体的に学び，表現する力を育てる
- ②大人数の中で自分の考えを堂々と表現したり，友達と一緒に活動したりする力を育てる
- ③地域の教育力の活用による探求型授業を充実し，地域の課題解決に参画しようとする力を育てる

3. 調査研究対象校の状況

◆調査研究対象校

邑南町立日貫小学校（3学級，13人）

◆調査研究対象校を存続することとした背景・理由

市町村の概要にもあるとおり，日貫小学校を含め地域に小学校は欠くことのできない存在であり，当分の間は統合しないとの判断をしているため。

◆調査研究対象校における地域との連携の状況

地域の大人が学校での教育活動に参加したり，公民館活動や地域学校等でも休日を使って独自の教育活動を展開したりするなど，子供と地域の大人がともに学ぶ環境となっており連携しやすい環境になっている。

◆児童生徒数を確保するための工夫

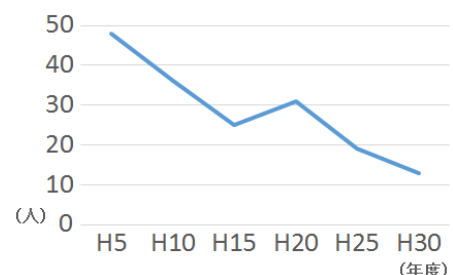
町の防災無線やケーブルテレビ，新聞社各紙等で日貫小学校の活動を紹介し，町民の方に関心をもってもらうようにしている。また，小規模特認校制度も検討中である。

◆調査研究対象校の位置



日貫小学校は邑南町の西部にあり，役場から9km離れた所にある。川を挟んだ所に日貫保育所があり，日貫公民館は800m離れた所にある。

◆対象校の児童生徒数の推移



4. 本調査研究において取り組んだ内容

【小規模校のメリットを最大化させる取組】

～様々なことに興味を示し、「なぜ？」と問い、主体的に学び、表現する力を育てる～

小規模校だからこそできる多様な体験・徹底した個別指導の活動に取り組んだ。小規模のメリットを生かすことにより、ひとりひとりに道具が揃い、知りたい、やってみたいと思った事に集中して取り組む事ができた。



【ふるさと学習】



【日貫っ子ども会議】



【図書館・辞書引き学習】



【ロボット学習】

【小規模校のデメリットを最小化させる取組】

～大人数の中で自分の考えを堂々と表現したり、友達と一緒に活動したりする力を育てる～

近隣の小・中学校，高等学校，養護学校，保育所，公民館とのネットワークを生かす取組を行った。日ごろの学習の成果を試したり，発想を広げたり，多くの人に発表する機会となった。



【おおなんドリーム学びの集いの発表】



【竹林整備（県立大学生と）】



【保育所との合同学習】

～地域の教育力活用による探求型授業を充実し，地域の課題解決に参画しようとする力を育てる～

「まちづくりワークショップ」「紙すき体験」「旧山崎家住宅での学び」などで地域の方々や地域の文化など，地域の教育力を存分に活用し教育課程に取り入れ授業の充実を図った。



【まちづくりワークショップ】



【紙すき体験】



【旧山崎家住宅での学び】

5. 研究の成果と今後の取組

◆研究の成果

【小規模校のメリットを最大化する取組】

疑問に思ったことは傍らにある辞書や書物ですぐに調べたり，近くの大人（地域の専門家，学問の専門家）にすぐ尋ねられたりすることができた。「みんなに教えられるから」「自分の調べた事をみんなに教えてあげられるから」と発表することで学習意欲が高まっている。

【小規模校のデメリットを最小化する取組】

他校交流において一緒に学習したり，活動したりすることが楽しいと答えた児童は83%だった。

考えをまとめ，地域の方たちに向け発表することで，更なる活動意欲と探究心が湧き上がり，地域の課題解決に参画しようとする力が行動としてあらわれるようになった。

◆今後の取組

保小・小小・小中のみならず，町内の養護学校，高等学校，町，県，全国，世界への発信も意識し，より幅広い仲間とのコミュニケーション能力を育成しながら持続可能なまちづくりを目指す児童を育てる。

6. 学校の存続に課題を抱える自治体へのメッセージ

小規模校は同世代の子供と関わる機会が少なく，多様な視点の獲得，コミュニケーション能力の育成などの面でデメリットが多いと思われるがちである。

しかし，地域の大人が教育活動に参加し，地域の教育活動の中で子供も参加することから多様な視点を獲得し，コミュニケーションの機会も多様となっている。さらに，小規模校のメリットである「意志決定の早さ」と「個別指導」を生かし，柔軟にカリキュラムを動かすこともできる。